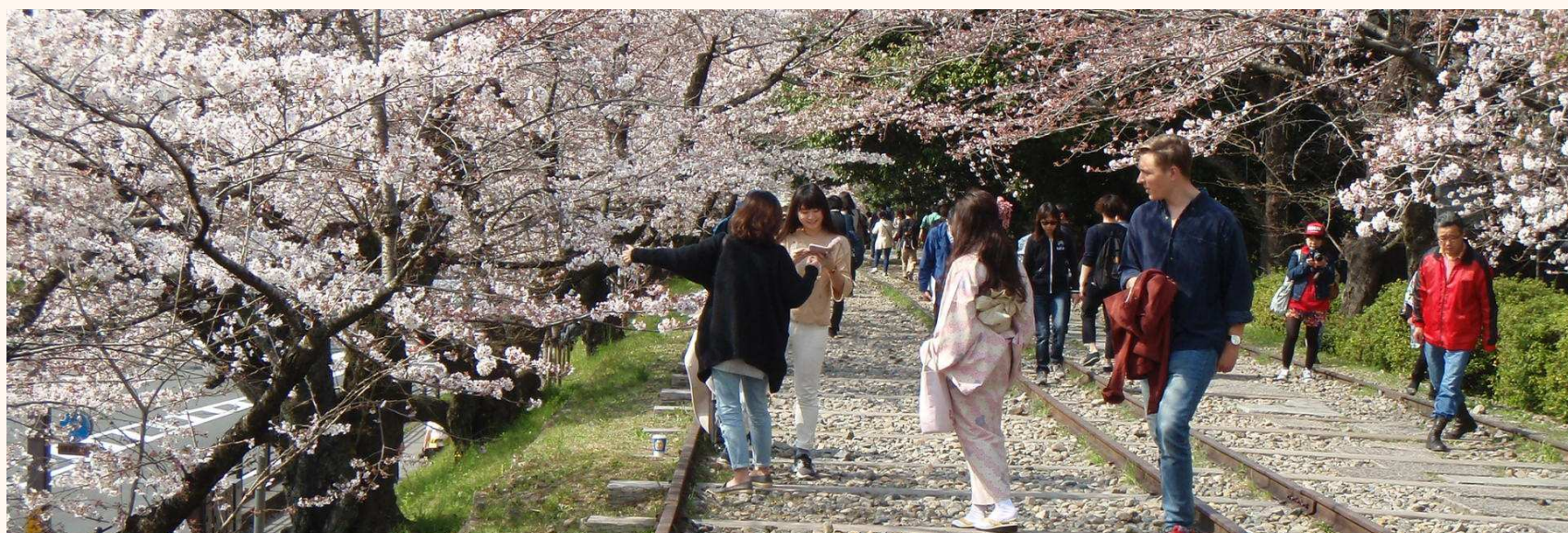




春のインクライン

JR東海のコマーシャル「そうだ 京都、行こう。」に影響されて、無性に京都の桜が見たくなってしまいました。京都でソメイヨシノの開花便りを聞いたのは3月23日、昨年より4日早い開花宣言でした。あれから寒い日が続きなかなか見頃になりません。しびれを切らせて出かけたのは一週間後の3月31日木曜日、東名高速道路の東京料金所を車で通過したのは朝8時を少し過ぎた頃でした。

ところで、九州福岡での開花宣言は3月19日と最も早く、熊本22日、宮崎24日、鹿児島27日と、なぜか九州の桜前線は北から南へ南下しています。これは今年の暖冬が原因で、南に行くほど蓄の「休眠打破(きゅうみんだは)」が遅れたため、桜も人間も厳しい寒さを経験しないと立派に成長しないと云う事です。

「休眠打破」に似た商品が「眠眠打破」。「ここぞの瞬間 眠気を吹き飛ばす。」という触れ込みの常盤薬品工業のカフェイン飲料です。

これに輪を掛けて発売されたとんでも無い代物が「激強打破」、「眠眠打破」の姉妹品でスッポンや高麗ニンジンエキスを配合は当たり前、ウミヘビや馬の心臓まで入っているということで、これでは目が覚めるところかギラギラに充血してしまいます。

「休眠打破」ならぬ「眠眠打破」を飲みながら車を飛ばし、新東名の清水サービスエリアでしばらく休憩します。このサービスエリアの特徴は、とにかく広くて豪華なトイレ。高級ブランドを扱うブティックのようなおしゃれな外観に、無料(ただ)で利用するのは気が引けてしまいます。

トイレを済ませた後に、決まって立ち寄るのは江ノ島のフレンチトースト専門店「[LONCAFE](#)」。静岡抹茶とあずきとバナナのフレンチトーストの程よい甘さは、運転で疲れた脳内を隅から隅まで癒(いや)してくれます。

ゆっくりする時間のない場合のお勧めは、お土産店の隣のアイスボックスに入れられた[贅沢フルーツアイス](#)。イチゴやメロン、パイナップル、マンゴウ、キウイなどを串に刺して凍らせただけの氷菓なのですが、なぜかそのシンプルさに惹(ひ)かれます。

この先も、途中休憩を挟みながら新東名、伊勢湾岸道、新名神と高速道路を乗り次いで京都を目指します。到着したのは14時前で、まずは琵琶湖疏水の蹴上インクラインを目指します。



清水サービスエリアの豪華トイレ



「LONCAFE」



贅沢フルーツアイス



インクライン



琵琶湖疏水

琵琶湖疏水とは、琵琶湖の水を京都市へ流すために明治時代に作られた水路ですが、蹴上から京都中心部へ下る急坂を船を乗せて通すために作られた線路がインクラインで、高低差のある運河に設けられた船の交通システムです。

桜の開花宣言以来、しばらく寒い日が続いていましたが、昨日今日の暖かさで花芽が一気に開いたようです。ここですれ違う観光客は、やけに外国人が目立ちます。その中でも中国・韓国人は、日本人とほとんど変わらない風貌なのですが、写真を撮る時のポーズがいたって大げさです。人ごみの中を歩いてみても、話す言葉は身に覚えの無い言語ばかりで、桜と京都の人気は絶大のようでありました。

足元を注意深く見て見れば、四本の鉄のレールが平行に並び、それを枕木に固定しているのが「[犬釘](#)」と呼ばれる留め金具。インクラインの線路では、犬型(イギリス製)と亀型(アメリカ製)の両方の金具が使われています。

これを紹介していたのはNHKの人気番組「[ブラタモリ](#)」で、犬型の犬釘に興味深深。最近のタモリの顔つきは、笑っていいとも終了後、海に解き放たれたイルカのようにのびのびとしています。



ブラタモリ



犬釘

昨夜は京都に宿泊し、今日は奈良県吉野に向かいます。吉野といえば万葉集にも歌われた、桜の原点とも云える所です。ちなみに、標準的な日本の桜となった「ソメイヨシノ(染井吉野)」は、江戸染井村の植木職人によって開発され盛んに栽培された品種のようですが、この名前は明らかに吉野への憧れからだろうと思います。

京都から吉野へはおよそ100km、第二京阪道路から近畿自動車道、南阪奈道路と乗り継いで2時間近く掛かります。しかも高速を降りてからはほとんど山の中、夢にまで見た吉野の里はとにかく遠く、陸の奥深くにありました。

吉野に着いて、まず訪づれたのは道の駅「吉野路 大淀iセンター」。大阪と奈良ナンバーが多い中、足立ナンバーは異色です。駐車場の案内係にも、遠いところからわざわざよく来たと、労(ねぎら)いの言葉を掛けて頂きました。



吉野の桜(七曲り坂)

ここで軽い食事を取った後、案内所で情報収集し、最初に向かったのは吉野山の上千本から下千本までを見渡せる[豊太閤花見塚](#)という見晴らし台です。吉野山の桜の魅力は山一面に咲く様子、この地の桜は平安時代の頃から植え続けられてきた山桜で、3月の末に咲き始め標高を上げながら四月中旬まで楽しめるということです。

続いて、現存する日本最古と言われる吉野山ロープウェイの千本口駅に行ってみれば、30分待ちということで利用を断念しました。仕方が無いので、[七曲り坂](#)をのんびり歩いて上ることにします。上に登るにつれて視界が広がり「一目千本」の言葉どおり山裾(やますそ)をピンクで覆(おお)う霞(かすみ)のような風景が広がっています。

青空に映えるこの色合いは、まさにパントン(Pantone)が今年のトレンドカラーとして選んだローズ・クォーツとセレンティティ。ローズ・クォーツ(Rose Quartz)とは[紅水晶](#)(べにずいしょう)のことですが日本色では桜色、一方、セレンティティ(Serenity)は晴れ渡った空の色で目の前の風景そのものです。

七曲り坂を登り切り、金峯山寺(きんぷせんじ)の参道までくれば、吉野山観光駐車場からバスを降りてきた観光客でごった返しています。桜は五分から七分咲きで、まさに見頃の時期に間に合いました。少し先には金峯山寺の総門である「黒門」があって、ここは万葉の時代から脈々と続く信仰の地「吉野山」のほんの入り口でありました。

見た目にはすばらしく見える吉野の桜も、数年前から立ち枯れが急増しているという報道がありました。京都大学のメンバーを中心とした「吉野山サクラ調査チーム」の報告によれば、キノコ([ナラタケモドキ](#))による被害が多く見られたとのこと。然(しか)るにそうなった要因は、気象環境の変化、観光客が捨てたゴミによる土壌悪化、密植による樹冠競合激化などと複合的で、桜の植生が如何に微妙なバランスの上に成り立っているかを実感します。

そもそも山を覆う桜の数は3万本、樹の寿命を仮に100年としたら、これを維持するためには毎年300本の元気な苗木を植え続ける必要があるということで、人が手を加えた自然を維持するのは、本当に大変なことだと思います。



吉野山のヤマザクラ(山桜)



金峯山寺参道